

千葉市動物公園リスタート構想 —概要版—

平成26年3月

千葉市動物公園

目 次

はじめに	1
1 目的	2
2 基本理念	3
3 基本方針	3
4 5つの取組目標	4
5 構想期間	5
目標1 特徴ある動物展示の実現	7
1 動物の配置	7
2 施設整備	7
3 わかりやすいゾーン	9
4 展示方法	13
目標2 教育・普及活動の充実	15
1 教育方針	15
2 教育・普及拠点の整備	15
3 教育・普及プログラムの充実	16
目標3 国際的動物園への脱皮	17
1 種の保存	17
2 調査研究	18
目標4 集客力の向上	18
1 ホスピタリティの充実	18
2 快適性と魅力の向上	20
3 戦略的な集客	21
目標5 持続可能な運営体制の構築	23
1 財務体質の強化	23
2 管理運営体制の見直し	24
3 地域に開かれた動物園へ	25
4 省資源・資源循環型動物園を目指して	26

はじめに



千葉市動物公園は、動・植物とのふれあいをテーマとし、動物園が持つ機能に公園的要素を加え、市民のための憩いの場として計画し、建設されました。

昭和60年4月に一次開園としてオープンし、その後、昭和63年4月に二次開園、平成3年に三次開園として遊園地を含む園全体が完成して以来、28年が経過しました。

一時は年間100万人を超える来園者を集め、大きな賑わいを見せましたが、少子高齢化や余暇の過ごし方の多様化など、社会構造や人々の価値観の変化に伴い、来園者数は年々減少傾向となっています。

飼育動物の高齢化や、それに伴う一頭飼いの増加、展示内容の陳腐化、また、遊戯施設の経年劣化がみられるようになり、来園者減少の一因につながっています。

そこで、開園50周年に向けて、園全体を見直し、賑わいを取り戻し来園者にご満足いただけるような施設として再生するため、千葉市動物公園リスタート構想を策定しました。

リスタート構想策定にあたって、平成24年度には、「千葉市動物公園のあり方に関する基礎調査」において、市民や来園者アンケートの実施、有識者による検討会の開催、千葉大学生によるワークショップの実施、他園の環境や方向性等の調査から、本園の置かれている状況や来園者の評価、現状や課題、今後の動物公園のあり方について検討を重ね、動物公園を「市民に身近な動物園（私たちの動物園）」、「都市の活性化につなげる集客施設」と位置付け、再生の方向性として決めました。

平成25年度では、基本理念や基本方針を定め、「千葉市動物公園リスタート構想」に取りまとめました。今後、次期実施計画等に具体的なアクションを位置付けて推進していきます。

千葉市動物公園は、これからも千葉市を代表する観光施設として多くの方に来園して頂けるよう、また、市民の方々の憩いの場として、教育学術関係施設として、「来てよかった、また来よう」と思っただけけるよう、職員全員の意識改革のもと、経営改善に取り組み、来園者へのサービス向上や人と動物が幸せに暮らせる環境づくり、動物の保護、繁殖技術の向上、次代を担う子どもたちの教育の場として一助となるように努めていきます。

平成26年3月

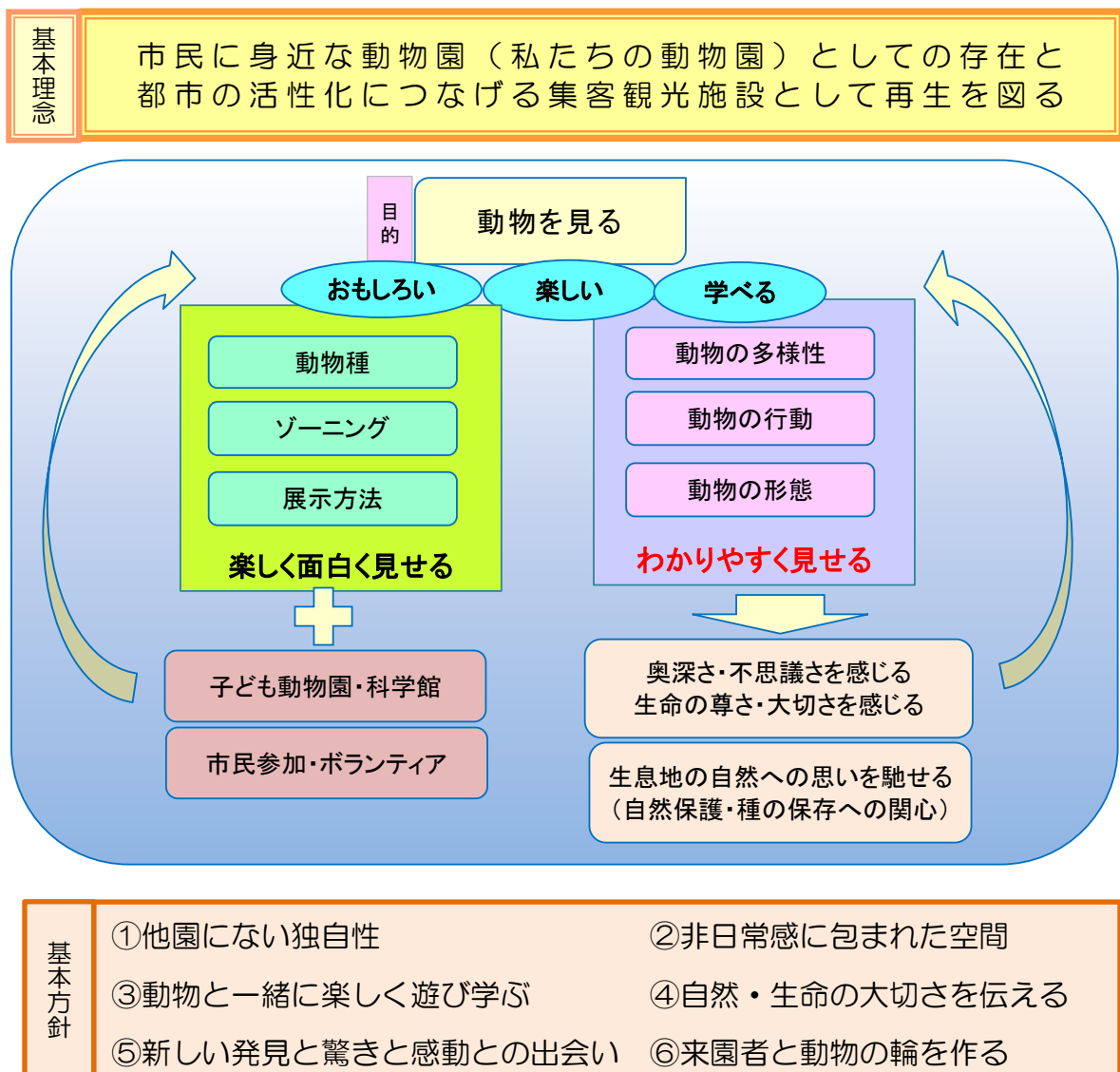
千葉市長 熊谷 俊人

1 目的

千葉市動物公園は、開園後4半世紀以上が経過し、施設の老朽化対応や展示手法等の刷新が喫緊の課題となっています。

「千葉市動物公園の在り方に関する基礎調査結果」を踏まえ、老朽化、陳腐化している動物展示施設や展示形態の改善に早急に着手し、来園者満足度の向上を図り、再び賑わいを取り戻すことで、今後も、市民にとって感動を味わうことのできる素晴らしい施設として継続運営していくことを目的として、「千葉市動物公園リスタート構想」を策定します。

【リスタート構想概念図】



2 基本理念

市民に身近な動物園（私たちの動物園）としての存在と、都市の活性化につなげる集客観光施設として再生を図る

「市民に身近な動物園（私たちの動物園）」として、長く愛される施設となるため、市民が関わる仕組みを作り、市の施設としての存在意義を高めていくとともに、千葉市全体が活性化するよう、多くの来園者が訪れる施設を目指していきます。

3 基本方針

■他園にない独自性の追求

動物を「楽しく」「わかりやすく」見せる「特徴展示」により、独自性を追求します。

■非日常感に包まれた空間の演出

エントランスを通過した瞬間から、動物園の雰囲気高める演出を施すとともに、レストランや売店も含めた楽しい雰囲気づくりに取り組みます。

■動物と一緒に楽しく遊び、学ぶ

動物を見て、動物と一緒に遊ぶうちに、いろいろなことに気づき、自然に学べる仕掛けをたくさん用意し、「楽しさ倍増」を目指します。

■自然・生命の大切さを伝える

環境保全や種の保存活動など動物園の役割を果たすことを通じて、自然・生命の大切さを発信していきます。

■新しい発見と驚きと感動との出会い

来園するたびに、動物についての新しい発見や驚きがあり、動物に感動するような動物園を目指します。

■来園者と動物の輪をつくる

来園者が動物園の活動に参加できる仕組みを増やし、動物を身近に感じてもらうとともに、来園者によって支えられる参加型の動物園を目指します。

4 5つの取組目標

基本方針に基づき、動物公園が果たすべき「5つの取組目標」を掲げました。目標を達成するための施策を体系化し、構想を推進していきます。

目標1 特徴ある動物展示の実現

- 遊園地部分を含めた動物公園全体のゾーニングを見直します。
- ゾーンごとに来園者にわかりやすいテーマを設定し、テーマに合わせて動物を再配置、新規導入します。
- 動物の持つ特徴を引き出す展示手法である「特徴展示」を取り入れます

目標2 教育・普及活動の充実

- 教育方針を定め、子どもから大人までを対象とした指導体系を確立します
- 教育・普及活動の拠点となる施設を整備し、教育活動の効果を高めます
- 「指導者に対する教育」を強化します
- 教師・児童・生徒の学習を助けるプログラムを開発します

目標3 国際的動物園への脱皮

- 種の保存計画を策定します
- 絶滅危惧種の保存に協力します
- 各種協会への加盟により、国内、国外との連携を強化します
- 動物の飼育自体を研究テーマとして位置づけ、研究成果を発表します

目標4 集客力の向上

- 飼育員により動物公園の魅力を高めます
- 来園者の快適性を重視したサービス提供を実施します
- 親子三代を意識し、動物公園らしい集客方策を検討します

目標5 持続可能な運営体制の構築

- 集客力の向上につながるよう組織運営体制の見直しを検討します
- 収支の改善に向けた取組みを推進します
- 市民や企業の協力を得ながら運営していく仕組みを作ります
- 環境にやさしい取組みにより環境保全に関するメッセージを発信します

5 構想期間

(1) 施策推進の考え方

本構想の期間は、施設の耐用年数を考慮し、また、開園50周年に向けた長期構想とします。また、入園者数の目標は、最終的に100万人を目指すこととします。

- 子どもゾーンは、千葉市動物公園の特徴を最も表現し、集客の要であることから、他に優先して整備に着手します。また、入口のウェルカム動物の配置を先行して実施するほか、平原ゾーンでは猛獣の導入、森林ゾーンではオランウータン等の空中展示の整備を優先していきます。

(2) 重点取組の設定

動物公園リニューアルに際して、最も象徴的な取組みについて早期に実現させるため、「重点取組」に位置づけて集中的に取り組めます。

特に、遊園地エリアを「子どもたちの夢の空間」として再生することに重点を置き、リスタート構想の目標である「身近な動物園」に近づけていくとともに、子どもたちに対する教育的な施策を早期に充実していきます。

【重点取組】

1 肉食獣の導入

本園がリスタートするにあたり、来園者からの要望が高く、これまで配置していなかった肉食獣（ライオンなど）を新たに導入します。

2 ウェルカム動物の配置

来園者をお迎えする正門、西門、北門付近に「ウェルカム動物」を配置し、エントランスから動物展示までの距離を縮め、動物園らしさを全面に出していきます。

3 モノレールからの存在感アップ

千葉都市モノレールの車窓から動物園の様子がわかるように、動物や施設の再配置を実施するとともに、本園と直結する動物公園駅から動物園の雰囲気づくりに取組み、誘客につなげます。

4 お客様目線でのおもてなし

「また来よう」と思っただけのよう、おもてなしの心を持って、千葉市の集客施設としてふさわしい接客を心がけます。

5 動物ワールドの創出

動物の展示だけでなく、動物にかかわる様々な情報を集め、発信するとともに、地域の学校や各種団体、市民の協力を得て、動物に関するイベント、展示を積極的に実施します。

6 「種の保存」に世界レベルで貢献

種の保存計画を策定するとともに、絶滅危惧種繁殖のため、国内外との連携を強化し、国内、園内での繁殖に貢献します。

【施策体系図】



目標 1 特徴ある動物展示の実現

1 動物の配置

(1) ゾーン計画

ゾーンについては、生息環境・地域・テーマを設定し直した上で再編し、動物を「楽しく」「わかりやすく」見せる「特徴展示」により独自性を追求するとともに、非日常感にあふれた空間の演出をしていきます。

(2) 国際的な動向を踏まえた動物配置

4ゾーンのテーマに合わせて、動物の再配置を行うとともに、国際的に絶滅が危惧されている動物種を積極的に受け入れ、野生への貢献を果たします。

【ゾーンの再編】

旧ゾーン	環境	地域・テーマ	配置する動物
モンキーゾーン 動物科学館 子ども動物園 小動物ゾーン	森林ゾーン なんでも動物館	アジア アフリカ アメリカ	オランウータン アルマジロ ナマケモノ など
家畜の原種ゾーン 草原ゾーン	平原ゾーン	アジア アフリカ アメリカ	ライオン モウコノウマ キリン など
鳥類・水系ゾーン	湿原ゾーン	水と空	ビーバー マレーバク ヘビクイワシ など
遊園地	子どもゾーン ビジターセンター	ふれあい体験	ポニー ヤギ テンジクネズミ など

2 施設整備

(1) 施設整備の考え方

現在ある施設は、動物舎も含めて耐用年数まで利用することを前提に改修、活用していきます。また、耐用年数に合わせた施設整備計画を策定し、計画的に見直し、廃止、建替え等を検討していきます。

(2) 環境に配慮した整備

新たに設置する施設については、省エネルギーの設計にするとともに、自然エネルギーに対応した機能を積極的に取り入れ、環境にやさしい動物園を目指します。

また、動物の糞や園内で集められた落ち葉などを堆肥へ活用するとともに、その利用者を積極的に発掘し、資源循環に努めます。

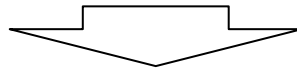
(3) トータルサイン計画の策定

テーマ別のゾーン再編に合わせて、トータルサイン計画を策定し、来園者にとって分かりやすく、統一感のあるサインに見直していきます。

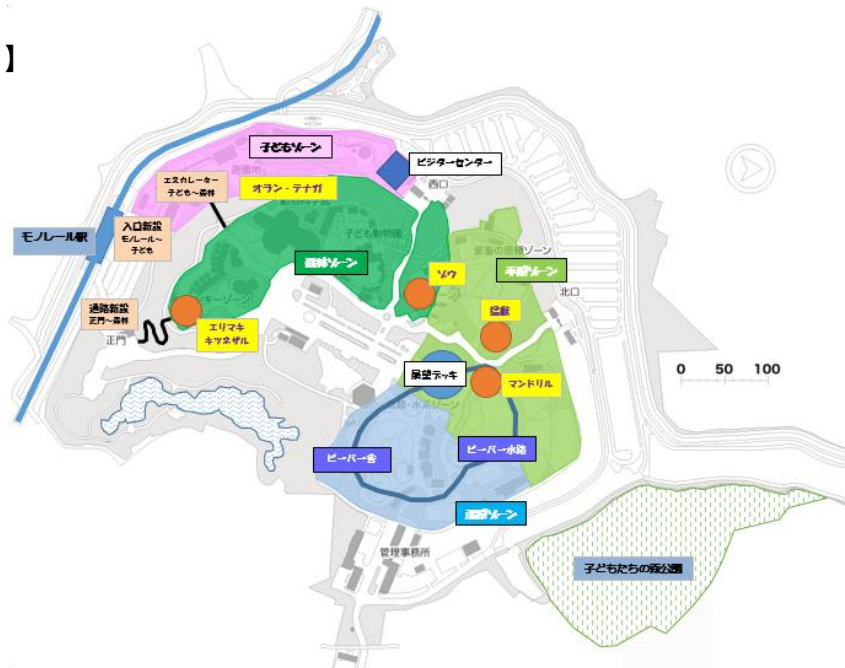
(4) 動線の考え方

安全・安心で、かつ目的地へ最短距離で移動できる、優しく快適な移動動線を再整備します。

【現ゾーニング】



【完成予想図】



3 わかりやすいゾーン

(1) 森林ゾーン（アジア、アフリカ、アメリカの動物）

1) 展示内容

- アジアやアフリカ、アメリカの森林に生息する動物を展示します。
- 食性や行動の違いを観察できるような仕掛けを作ります。
- 植栽等の配置で森林の中で動物を観察するような疑似体験を可能にします。
- 木の上で生活する動物と、地面の上で生活する動物を同時に展示する「複合展示」を実施します。

2) 展示イメージ

オランウータンとテナガザルが、来園者の通路の上を空中散歩し、木の上を移動する様子を観察できる。

ゴリラは群れで悠々と生活している。比較舎のサルたちは「ケージ」を感じない、ガラス等の透明素材越しや、オープン展示のピット式で、その種の生息環境（樹上、地上）にあわせた展示場にいる姿を見ることができる。

樹上性のオマキザルやナマケモノが、木から木へと移動する姿や、樹上での活動が一目で見られるように、樹上性はより高くし、また地上性のアルマジロやアリクイは展示場をより広く設け、動き回る様子が観察できる。

【オラン・テナガの空中散歩】



(2) 平原ゾーン（アジア、アフリカ、アメリカの動物）

1) 展示内容

- アジアやアフリカ、アメリカの平原に生息する動物を展示します。
- 草原ではキリンや他の草食獣、鳥類との混合展示を行います。
- 草食動物とそれを捕食する肉食動物を展示しアフリカの生態風景を再現します。
- モウコノウマなど絶滅危惧種の繁殖に積極的に取り組みます。

2) 展示イメージ

猛獣を間近で観察でき、ライオンやチーター等とのパノラマ展示でアフリカの平原を再現する。

また、草原では広々とした草原の中で、キリンやオリックスの混合展示をし、群れている姿を展示することで、活動的な賑わいを味わう。

また、ダチョウ、シタツンガ、草原にすむ動物などを混合展示し、アフリカの草原を再現していく。

アジア草原ではモウコノウマがたたずんでいる。

動物を俯瞰したり、見上げたり色々な角度から動物を観察できるようになっており、大きさや生態を間近に体感することができる。

【猛獣の導入（ライオン）】



(3) 子どもゾーン

1) 展示内容

- 遊園地跡地に配置し、モノレールから動物園の楽しさが感じられるよう工夫します。
- ポニーの乗馬など、人間と動物がともに楽しめる場を設けます
- 新たに「ビクターセンター」を設置し、学校等の団体の受け入れの場や学習・教育活動の拠点として活用します。
- 子どもたちが小動物に直接触れる場を常設し、「命の大切さ」や癒しを伝えます。
- 人間とかかわりの深い家畜を展示し、総合学習や環境教育のきっかけを提示します。
- 遠足等の団体客の休憩所としてパーゴラなどの大規模休憩施設を設置します。
- 子どもたちが暑いさなかでも楽しく遊べる場所として「ジャブジャブ池」を設置します。

2) 展示イメージ

子どもたちが興味のある動物の側へ近づき触れ合うことができる。

世話のできる家畜類の中では、家族や仲間たちと一緒に子どもたちが楽しんでいる。テンジクネズミやマウスなどの小動物を職員の説明を聞きながら初めて触り、からだの温もりや動きを命として感じ、目を輝かせている。

また、ポニーの乗馬により、動物への親近感を誘発させ子どもたちが歓声を上げながら楽しんでいる。家族や遠足で来た子どもたちが、小動物に直接触れることで、温もりや匂いも含め、命の大切さを感じ、学ぶことで、思いやりの心を育むきっかけの場となっている。

【ポニー乗馬】



(4) 湿原ゾーン

1) 展示内容

- 水辺の動物や空中を飛ぶ動物を展示します。
- 空中を飛ぶ動物については、ケージの拡充等により、大型の鳥類が飛翔する様子などが観察できるよう、展示手法を改善します。
- 水辺の動物については、ビーバーのダムづくりの様子など、水辺で生活する様子が観察できる仕掛けを設置します。
- 動物らしい行動を促す環境を再現し、来園者と動物がより一体感を保ち、目の前で動物を見ることができるよう展示方法を改善していきます。

2) 展示イメージ

ビーバーは、園路をめぐる水路の一部でダムを作り、その様子を観察できる。水路の途中には水力発電をする水車が設置されている。

大きな樹木と旧水禽池、芝生広場の一部をネットで覆った大型フライングケージのなかで、多種多様な鳥たちが自由に飛翔し、自然に近い展示の中で営巣している。ウォークスルーの展示場内では、鳥たちが巣作りや子育てをする姿など、多様な生活を間近で見ることができる。

ツル類や猛禽は、各展示を比較できるようにサインが充実しており、ハシビロコウも放飼場を拡充したことで飛ぶ姿を見ることが出来る。

開放的な水槽でペンギンが泳ぎ回っている。その姿を上から覗き込むだけでなく、水槽の窓から観察したり、下から見上げ空を飛ぶように泳ぐ姿を見ることができるよう、非日常感を得ることができる。

【ビーバーと水路・水車】



(5) 大池ゾーン

1) 展示内容

- 大池全体を大型のビオトープとして位置づけ、野鳥だけでなく、生物多様性や生態系を観察し、体験することができる、自然溢れるエリアとして活用します。
- 山野草等の植栽、昆虫飼育等を付加し、豊かな里山を再現していきます。
- 野鳥の観察など、季節の変化を楽しめる場としてPRし、散策を整備することで、新たな来園者の獲得につなげていきます。

【大池の四季】



4 展示方法

(1) 特徴展示の実施

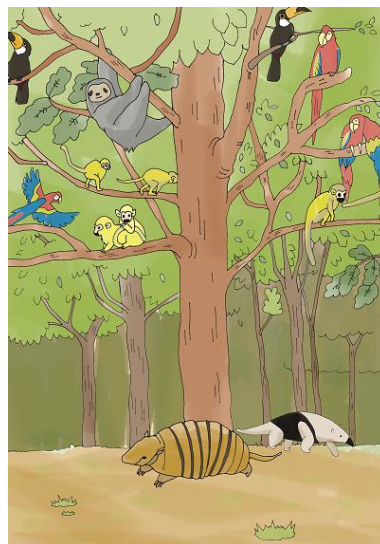
動物展示においては、種の生態や行動、生息などの特徴がわかり易い展示である「特徴展示」の手法を取り入れます。また、動物を見て「楽しい」「面白い」と感じられるよう、動物の特徴を引き出す展示手法を取り入れます。

【上下を利用した展示 南米】

(2) 複合展示の実施

同じ地域・環境に生息する動物を同時に見せる「複合展示」の手法を取り入れます。

具体的には、地上で生活する動物と、木の上で生活する動物が同時に観察できるような展示や、本来同じ生息地で生活している動物を同じ放飼場で飼育することで、生息地を再現していきます。



(3) 展示動物の選択と繁殖

現在飼育している動物については、テーマや展示目的に合わせて整理・統合していきます。また、国際的な交流を活性化し、世界的に希少な動物の繁殖に協力することで、社会的役割を果たすことを強く意識していきます。

(4) 自然的素材を生かした展示

園全体の都市公園の雰囲気を生かしながら、人工的建造物が出来るだけ見えないような展示を心がけ、樹木や岩など自然的素材を生かした、美しく楽しい展示としていきます。

【ナマケモノの人工飼育】



【自然的素材を生かした展示】



(5) 環境エンリッチメントの追求

動物たちの居住・生活環境を豊かにする「環境エンリッチメント」の考え方にに基づき、野生下でみられる行動が再現できる動物の暮らしやすい環境づくりを進めていきます。

【消防ホースの再利用】



(6) 展示の持続的な改善

野生動物への知見は日進月歩であり、常に動物の生態や行動への評価は進歩していることから、こうした動きに対応して、展示方法や展示内容を常に改善していきます。

改善は定期的実施し、展示内容の陳腐化を防止するとともに、生活環境に変化をつけるなど新たな視点での展示手法の開発に努めます。

また、爬虫類や両生類、昆虫などの飼育及び展示についても検討を進めます。

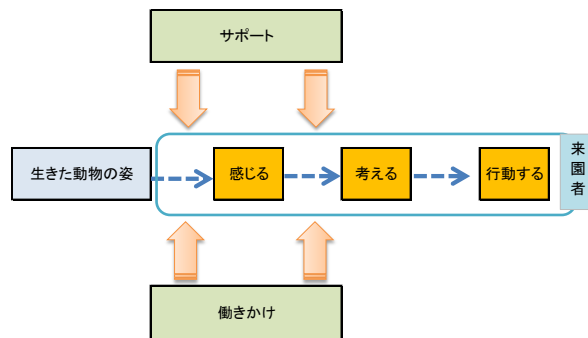
目標 2 教育・普及活動の充実

1 教育方針

(1) 「動物を見て、自分で考え、発見し、行動する」

生きた動物を見せることで、生命や自然環境について「感じる」「考える」そして、「行動する」きっかけを職員から働きかけを行っていきます。

【教育方針 概念図】

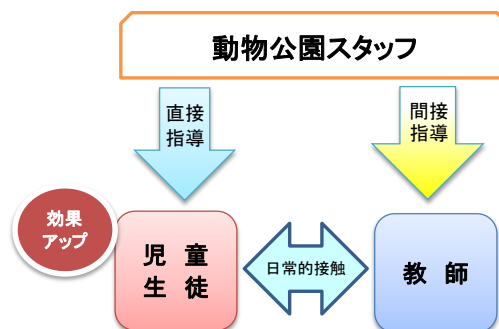


(2) 指導体系の確立

来園者の年代や学習ニーズに合わせたプログラムを段階的に開発し、来園者がステップアップを実感できるような指導体系を確立していきます。

さらに、児童・生徒に対する働きかけ（直接指導）だけでなく、教師、ボランティアなど、指導的役割を果たす者に対する働きかけ（間接指導）の導入により、より効果的な学習・指導体制の充実に取組みます。

【直接指導と間接指導】



2 教育・普及拠点の整備

(1) 新たな機能の充実

子どもゾーンには、ビジターセンターを新設し、学習・教育・案内拠点として活用します。児童・生徒などの団体客の受け入れや、教員向け指導の場、教育スタッフの活動拠点に位置づけます。

また、動物との関わりを通しての命の大切さや儚さに対する教育を充実させるとともに、慰霊碑の一般開放や慰霊祭の開催により「いのちの博物館」としての機能を補完拡充します。

(2) 既存施設の活用と展示内容の刷新

動物科学館の展示は、子どもから大人まで広く対応できる展示内容とし、「動物絵本コーナー」「動物に関わる音楽コーナー」の設置や、動物に係る絵画や工作などのイベントを開催するなど、動物のことなら何でも分かる「なんでも動物館」を目指します。

3 教育・普及プログラムの充実

(1) 学校との連携強化

総合的な学習の場だけに限らず、各学校の学年別、教科別における動物の関わり方に合わせたプログラムを開発し、「調べ学習」「体験学習」などを通じて、動物園だからこそできる学習機能を強化していきます。

さらに、学校と動物公園とがともに授業を作る環境づくりに取組みます。

(2) 地域との交流

「動物」という共通のテーマで美術館や博物館などと連携し、学習のきっかけを与えるようなイベントや展示を実施することで、周辺地域との交流を活性化していきます。

(3) 教育支援プログラムの充実

学校の教員に対する教育プログラムを充実し、児童・生徒や来園者の学習効果をさらに高めていきます。また、学校に対する学習の効果を高めるため、事前指導を強化し、学習に広がりを持たせる取組みを強化します。

(4) 来園者向けプログラムの充実

来園者の中心である子どもとその母親や祖父母など三世代を視野に入れ、「大人も楽しめる動物園」として、幅広い層に対する教育プログラムを開発します。自然環境保全をはじめとする「持続可能な開発のための教育（ESD教育）」にも力を入れていきます。

(5) 教育プログラムの評価

教育プログラムについては、参加者アンケート等の実施により定期的に評価を行い、改善を図っていきます。

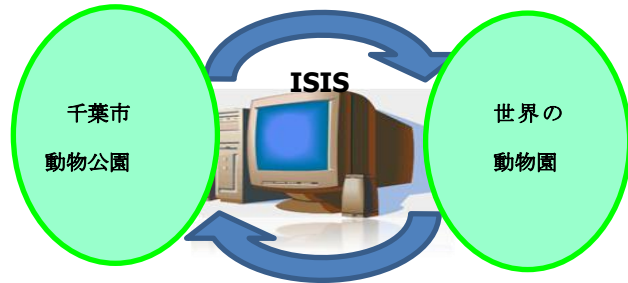
目標3 国際的動物園への脱皮

1 種の保存

(1) 種の保存計画の策定

国際種情報システム（ISIS）へ加入し、国内外の動物園との動物の交換や、繁殖のためのブリーディングローンを実施し、絶滅危惧種の繁殖に取り組めます。また、種の保存計画を策定し、計画に基づき、園内外の繁殖に貢献していきます。

【国際的な情報ネットワークの強化】



(2) 生息地における種の保存

千葉県で生息するコアジサシは、千葉県レッドデータブックで最重要保護生物（A）に指定されており、絶滅が危惧されています。地元の保全団体等との協力体制のもと、園内繁殖を目指し、将来的には放鳥を目指すことにより、地域の自然の再生に貢献します。また、モウコノウマの繁殖など国際的な野生復帰計画にも参画していきます。

(3) 世界動物園水族館協会への加盟

世界動物園水族館協会（WAZA）に加盟し、飼育下動物の情報を瞬時に世界中の動物園と共有できる体制を整えます。

(4) 日本動物園水族館協会事業への参加

公益社団法人日本動物園水族館協会の生物多様性委員会が血統登録種として定める約150種のうち、当園で現在飼育する35種をはじめとして、繁殖保存に取り組んでいきます。

また、野生下絶滅種となっているモウコノウマや日本の特別天然記念物であるニホンカモシカ、などについても新たな取り組みを開始します。

【モウコノウマ】



(5) 動物園内における種の保存

現在飼育している希少動物の繁殖に努め、他園とも協力して種の保存と持続可能な繁殖に努めます。また、研究機関と協力して取り組む体制を整えます。

2 調査研究

(1) 園内での研究活動

種の保存に関する研究をはじめ、園内で行う研究においては、補助金、交付金、支援金等を積極的に活用し、研究を行う上での財源を確保します。

(2) 園外での研究活動

地域の絶滅危惧種であるコアジサシの調査研究等、職員自身が園外での諸研究に積極的にかかわっていくことのできる環境を整えます。また、地元自然保護団体等の協力により、協働参画による域内保全研究も推進していきます。

(3) 大学・研究機関等との共同研究の実施

他園館、学術機関、教育機関等との共同研究を推進し、当園のみでは成し得ない成果を達成します。この成果をもとに当園の学術分野の向上を図り、研究機関としての礎を築きます。

(4) 研究成果の発表

調査研究の結果は、公益社団法人日本動物園水族館協会(JAZA)が実施する技術者研究会で報告することはもちろん、日本霊長類学会、ヒトと動物の関係学会、日本環境教育学会、全日本博物館学会等、各職員が所属している専門学術団体でも積極的に情報発信をしていきます。

また、日本国内のみならず、広く海外で行われている研究会(国際飼育係会議(ICZ)、国際動物園教育担当者会議(IZE)、アジア地域動物園教育担当者会議(AZEC)、国際動物トレーニング会議、国際環境エンリッチメント会議等)にも積極的に参加し、成果を発表します。特に重要な成果においては、世界動物園水族館協会(WAZA)で報告します。

目標4 集客力の向上

1 ホスピタリティの充実

【飼育員によるゾウの餌やりガイド】

(1) 飼育員による魅力づくり

飼育員が来園者に、より身近な存在となり、動物について楽しく、面白く解説できるよう、飼育員の研修を充実し、「飼育員による魅力づくり」を推進します。



- 飼育員の飼育スキル向上のための研修を充実し、動物ガイド等の動物の魅力発信に活かしていきます。

- 飼育員による動物公園の魅力発信の機会を拡大し、動物に関する情報提供を強化していきます。

(2) ICTの活用による交流と情報発信

ホームページから最新の情報をこまめ更新し、常に新鮮な情報を発信し、ホームページ閲覧者を「来園者」につなげていくような情報発信に努めます。

さらに、利用者に合った情報や情報交換の場を提供し、特に若年層の関心を高め、魅力向上と集客につなげます。

- Wi-Fi等の情報インフラ環境を整備し、便利に楽しく情報サービスが利用できる環境づくりを推進するとともに、常に最新の技術を利用したサービス提供を検討していきます。
- 携帯電話やタブレット端末を使った、楽しく面白い情報提供の仕組みを構築します。
- ホームページからの情報発信機能を高めます。
- 動物公園と来園者双方向の情報交換の場の充実を推進し、動物公園のファンやリピーターの増加につなげていきます。

(3) おもてなしの実践

接客や応対について動物公園で働く全職員が共通の考え方、価値観を持ってお客様をお迎えできるような体制づくりを重視していきます。

- 園へのアクセスの容易性や分かり易さ等を向上させ、進入路や出入口等の増設や改善について、関係機関及び市内関係部局にも働きかけながら検討を進めます。
- お客様が最初に通る正門、北門、西門においては、動物がお客様をお迎えする「ウェルカム動物」を配置します。
- 職員だけでなく売店やレストランの職員も含めた、動物公園スタッフ全員の「おもてなし」意識を高め、ホスピタリティ溢れる動物公園全体の雰囲気づくりに取り組みます。

【正門ウェルカム動物】



2 快適性と魅力の向上

(1) ユニバーサルデザインの充実

新たに設置する施設についてはユニバーサルデザインを取り入れた設計とすることはもちろん、既存の施設や案内表示についてもユニバーサルデザインを意識した改修をすすめていきます。

- 園内を快適で安全に移動できるよう、園路の舗装や段差に配慮し、乳幼児のベビーカーや障害を持つ方の車いす等に対応した整備を推進します。
また、ベビーカーや車いす等の貸し出しについて、充実を図ります。
- サイン表示においてもユニバーサルデザインの考え方を取り入れ、誰にでもわかりやすく、見やすい表示に取組むとともに、外国語対応を進めていきます。
- トイレについては、内装や照明、温水洗浄便座の設置など快適性を高めるとともに、改修に合わせ多機能化を進めていきます。

(2) 飲食・物販機能の充実

飲食や物販を、動物展示と同様に動物公園での大切な思い出の一部に位置づけ、出店事業者の選定や運営手法、商品開発など全体を見直し、魅力を高めていきます。

(3) 休憩機能の充実

広い園内に対応し、お年寄りや小さい子ども連れの来園者が気軽に休むことができるような、快適な休憩施設や、荷物を預けることの出来る大型コインロッカーや一時保管施設を設置し、観覧に専念できるための利便性を充実させます。

- ベンチを増設するとともに、既存のベンチへ屋根の設置を推進し、ゆっくり休める休憩所を充実します。
- 子どもゾーンにおいて大型休憩スペースを整備し、団体客の収容力を高めます。

【ベンチからキリンを見るお年寄り】



(4) サイン・案内機能の充実

園全体をカバーする「トータルサイン計画」を策定し、案内板や動物の説明板、樹木や花木の説明板、解説などをわかりやすく改善し、公園機能の充実も図ります。

また、案内板の電子化を計画的に導入し、タイムリーな情報提供と見やすさを重視した表示に努めるとともに、広い園内で現時刻の認識と行動の計画性を容易にするための時計表示等についても十分な配慮を行います。

(5) 快適な園内移動サービスの提供

急こう配部分については、園路の整備や新たな移動手段の導入検討など、幅広い観点から見直し、高齢者や子どもが楽しく巡回できるよう工夫します。

- 利便性だけでなく、都市公園であることを生かしながら「歩いて楽しい」園路整備を目指します。
- 三世代での来園者を意識し、移動負担の少ない園路整備を推進します。

(6) 子どもや高齢者向けサービスの充実

動物を見たり、動物と触れあうことだけでなく、公園としての利用方法を積極的に発信していくことで、新たな来園者の開拓につなげていきます。特に、こどもや高齢者が目的を持って来園できるような仕組みを構築し、新たな動物公園の楽しみ方を提案していきます。

- 子どもが水遊びを楽しむことのできる専用施設を整備し、安全性を確保します。
- 高齢者向けの乗馬など、動物公園を多様な活動の場として活用できるプログラムを提供し、動物公園の新たな楽しみを増やしていきます。

【中央広場噴水】



3 戦略的な集客

(1) 千葉市動物公園ブランドの創出

既に認知度の高い風太を「風太」については、これまで通りPRしていくとともに、「風太」に続く新たなマスコットキャラクターの開発に取り組んでいきます。

【風太】



(2) ターゲットの明確化

集客に際しては、ターゲットを明確に設定し、効果的な方策を検討していきます。また、まだ一度も動物公園に来たことのない市民に対して「行ってみよう」と思わせる仕掛けを企画し、新たなファンを増やし、千葉市動物公園の基本理念である「私たちの動物園」に近づけていきます。

- 「子ども」「高齢者」「カップル」など、ターゲットを明確にしたうえで、集客イベントを企画・実施し、集客効果を高めていきます。
- 「祖父母と孫」といった、新たな来園者像に対応した集客方策の開発に取り組みます。

(3) ファンの拡大

繰り返し来園したくなるような「仕掛け」を随所に導入し、リピーターを増やしていきます。

団体客については、駐車場の広さを生かし、旅行業者等との情報交換や連携を密にして団体客の受け入れ態勢を整えるとともに、団体客に対して魅力的なサービス提供を実施していきます。

- 集客増につながるように、パスポート料金設定の見直しを検討します。
- 来園回数に応じた特典の付与を検討します。

(4) 多様なイベントの実施

動物を通じて楽しむことのできるイベントを強化し、持続的に情報発信することで、来園者の満足度の向上とリピーターの獲得につなげます。

- カップルや高校生、大学生など、来園者に占める比率の低い年齢層をターゲットとした新規イベントを実施することで、新たな来園者の開拓に取り組みます。
- シニア層を対象として、平日に実施できる参加型イベントなど、今後増加が見込まれる年齢層をターゲットとした企画イベントを強化していきます。
- 来園者の中心である、小さな子どもとその保護者をターゲットとした、親子で一緒に参加できる体験イベントを充実していきます。

(5) 民間企業や大学との連携強化

駅から正門までを動物園らしい演出を施し、非日常感を高めていきます。さらに、千葉都市モノレールと共同のイベントの実施を強化するなど、モノレールを利用して来園することの楽しみを高め、来園者数増と乗降客数増の相乗効果を追求していきます。

千葉市内には多数の大学や高等学校があり、一部の学校とは連携した事業展開を実施しています。動物や環境など、動物園の特徴を生かした学習、研究の場や、学生のフィールド活動の場としての活用を推進していくことで、新たな視点で動物公園を見直し、魅力づくりに生かしていきます。

【共同のディスプレイ】



目標5 持続可能な運営体制の構築

1 財務体質の強化

(1) 収支の改善

将来にわたって持続可能な経営を続けるため、収入面では来園者数の増加により、入園料を確保するとともに、個人や企業からの寄付や広告料等の収入の増加を強化していく必要があります。また、人件費の圧縮方法についても具体的に検討・実施し、早急に収支の改善を図っていきます。

- 来園者数を把握し、その動向を分析し、来園者増加のための取組みにつなげていきます。
- 人件費の削減のため、職員の定員管理と適正配置を行い、効率的で効果的な人員配置に努めます。

(2) 寄付金・協賛の拡大

地域に密着した「私たちの動物園」として持続的な運営ができるよう、市民や企業からの支援により収入を支えていく新たな仕組みを構築するとともに、既存の仕組みについては、利用しやすいように制度の内容を見直し、参加者のすそ野を広げていきます。

- 「動物公園サポーター制度」の周知を強化するとともに、参加しやすいよう制度の見直しを実施し、個人の市民からの寄付金の拡大を目指します。
- ボランティア活動など、金銭以外の寄付の仕組みを構築します。

(3) 広告を活用した収入の確保

集客増につながる新たな整備や取組みに合わせて、ネーミングライツの導入や動物別の企業協賛による広告掲載など、動物園そのものを広告媒体とすることを検討します。

また、広告を兼ねた備品の導入や、企業が主体となって実施するイベント会場として動物公園を開放するなど、企業広告収入につながるような取組みを強化します。

- 「子どもゾーン」完成に合わせ、ゾーン単位のネーミングライツの導入を進めていきます。
- 猛獣（ライオンなど）導入などに際し、動物に因んだ企業協賛の募集の仕組みを構築し、定期的に募集できる体制づくりを進めます。
- 企業名入りの備品の設置や新商品の園内での啓発利用など、金銭以外でも企業が企業名・商品名等を広告できる仕組みを導入します。

（４）財務管理手法の改善

市税投入額の動きに着目していくとともに、収入目標を設定し、市税投入額の減少を目的とした健全な財政運営を目指します。

また、地方公営企業会計制度の見直しなど国の動向を見ながら、一般会計への移行の可否の検討を進めるとともに、指定管理者制度の導入や独立行政法人化についての検討を進め、資産評価など会計基準の見直しを行います。

2 管理運営体制の見直し

（１）組織体制の見直し

園内の組織をより柔軟な体制に見直すことで、固定的な役割意識を払拭し、全職員のスキルアップと効率的で効果の高い業務遂行を目指します。

集客力の向上に資する人材を育成するため、専門的な知識を持った職員を配置するとともに、専任担当者の配置を検討し、来園者の増加と満足度の向上につなげていきます。

- 現在の課制度からグループ制等へ移行し、多様な業務に柔軟に対応できる体制づくりを進め、来園者満足度の向上に向けた組織に再編します。
- これまで十分とは言えない体制であった営業部門の強化や、より質の高い教育機能を充実するため、専任担当者を配置します。
- 動物園の組織自体に多様な機能を持たせるように強化し、独立した施設として機能することを目指すとともに、他の部署との連携も深めていきます。

（２）民間活力の導入

動物公園内で実施する委託事業については、民間の知恵を最大限に活用し、経費の圧縮につながるよう、業者選定手法等の見直しを実施します。また、収支バランスの改善に取り組ながら、指定管理者制度の導入を検討していきます。

（３）職員の意識改革

人材育成に対して適切に投資し、他園や研究機関との交流や学会、研修への参加を促進するとともに、他園との人事交流を活性化し、職員の意識改革につなげます。

来園者サービス向上のため、接客に関する研修をすべての職員に実施し、集客施設と

してふさわしい接遇を身に着けるとともに、組織が横断的にコミュニケーションを図れる体制とします。

(4) リスタート構想の進捗管理

本構想の理念に基づき、基本目標を実現するために、毎年度検証していきます。

年に数回の来園者アンケート実施を定例化し、ホームページで公開していくとともに、来園者満足度などを評価の指標として経年変化を分析し、ご意見、ご提案を動物公園運営に活かしていくなど、常に改善に取り組んでいきます。

3 地域に開かれた動物園へ

(1) 地域の活性化への貢献

動物公園に「行ってみたい」と思っただけのような取組みの推進とともに、地域と連携した取組みを推進し、動物公園だけでなく周辺地域一帯、さらには千葉市全体の活性化につながるような賑わい創出を目指します。

さらに、市民に身近なペットや野生動物に関わる動物相談窓口の設置についての検討を進め、動物園と市民との親近感と利便性を向上させます。

- 「千葉市の文化の核」として機能するような文化拠点の役割を果たす動物園を目指します。
- 地域の行事・イベント開催への参加や協力など、地域活動の場としての活用を推進します。

(2) 多様なボランティアの活用

ガイド、イベント、ふれあい指導、清掃など、園内での様々な活動にボランティア活動を取り入れ、市民が楽しみながら、自分に合った形で動物園にかかわることができる機会を提供していきます。

- 動物ガイドや教育・指導だけでなく、作業なども含めた園内での多様な活動にボランティアの力を生かす仕組みを作り、ボランティア活動の場の充実を図ります。
- ボランティアの研修体制を強化し、ボランティアが参加する活動の場を増やしていきます。

(3) 市民参加機会の拡大

動物公園を活動の場として広く提供していく体制づくりを進め、動物公園を多くの人に利用してもらえるようにしていきます。

また、市民等が園内で活動しやすい体制整備を進めていきます。

さらに、動物公園をイベントの場として開放し、NPOや団体の活動の場として提供することで、地域活動の活性化に貢献します。

4 省資源・資源循環型動物園を目指して

(1) 再資源化の推進

施設全体が環境教育の教材となるよう、3R（リデュース・リユース・リサイクル）の推進とリサイクルシステムの構築（堆肥、間伐材など）を実施し、動物公園内での資源の活用を推進します。

(2) 再生可能エネルギーの積極活用

施設の新設・改修に合わせて、太陽光発電や小水力発電の導入等を進め、再生可能エネルギーの利用を推進します。

また、配置した再生エネルギーの成果をわかりやすく展示し、環境教育の教材として位置づけます。

(3) 里山環境の創出

樹木や花壇については、計画的に伐採、更新し、来園者が季節を楽しみながら散策できるよう維持管理します。

大池はビオトープとして活用し、周辺地域と連携した活用方策を検討します。

また、伐採した樹木等は園内で活用、資源化したり、園内で農作業を行い堆肥を利用するなど、里山環境を再現するような取組みを推進します。

千葉市動物公園リスタート構想

平成26年3月

■発行 千葉市動物公園
千葉県千葉市若葉区源町280番地
電話 043-252-7566